

『叱ってやって下さい。』

かんだ けんいち
神田 健一

●新日鐵住金大分労働組合・組合長

2013年が明け、早や2カ月が過ぎようとしている。時は間違いなく進んでいるが、わが労働組合は、変化をキャッチし前に進んでいるだろうか。昨年末の衆議院議員選挙の結果は、3年3カ月続いた民主党政権があっけなく崩壊、厳しい現実と自らの力不足を感じずにはいられなかった。石の上にも3年（じっと辛抱を重ねていれば、いずれ良い結果がもたらされる…）と言う諺になぞらえて、自民党の辛抱・努力の結果であったのならば割り切りもつくのだろうが、突きつけられた現実とは、生半可なものではなく組合組織活動にも関わる重要課題と受け止めている。

労働組合の究極の目的は、「組合員の幸せ」にある。もちろん、産業別組合、ナショナルセンター・連合は、そのウイングを広げ、すべての労働者、生活者の立場での幅広い幸せを追求していることはいままでのまではない。

その目的達成のために、私たちは労働諸条件の改善に取り組むとともに、雇用と生活の安心・安定の確立をめざし、産別・連合運動を通じた産業政策や政策・制度改善を車の両輪と位置付け活動を展開している。そのことを、より確かなものとしていくための手段が、県議会・市議会をはじめとする地方議会選挙や国政選挙などの各級選挙であり、その勝敗は組合員を基礎とする票の積み上げにかかっている。

他方、労働組合の組織活動は、職場を原点に互いの顔の見えるface to faceの活動が軸となるが、あらためて考えてみれば、日常の組合活

動も、いわゆる選挙闘争も組合員を核とした取り組みに他ならない。

その延長線上にあるべき衆議院議員選挙において、結果が示せなかったことを、単に、民主党政権に対するメディアの批判や民主党内の対立・離党などのドタバタ劇、突然の解散による準備期間の短さだけで片付けてはならない。労働運動の基本は、常日頃の職場・組合員との対話活動にあるが、目的を持った対話から逃げていたのではなかろうか。

政治学者の山口二郎氏が、民主党政権最初の挫折（鳩山首相）の折、「政権交代が日本の政治史の中で画期的な意味を持つことは、どれだけ強調しても誇張にはならない。— 中略 —民主政権のリーダーシップの弱さ、政治家たちの脆さ、政権運営を巡る戦略の欠如などによって、政権の欠陥やリーダーの質の悪さをいたずらに嘆くことではない。この政権交代が何を指すべきだったのかをもう一度確認した上で、本来の目的を達成できなかった理由を厳しく究明することこそが大事。」と語っている。

労働運動の原点に立ち戻り、自問自答しながら解を見つけ出さねばならない。『勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし』と野村監督の名言もある。自らを叱責する厳しさがなければ、事を前に進めることはできないのではなかろうか。

次は、決して負けられない夏の陣（第23回参議院議員選挙）。反省を活かし、組織と仲間を信じ、互いに叱りあって前に進みたい。